開館 20 周年記念企画

開館２０周年記念コンサート

おしゃべり音楽館　～気軽にクラシック～　　出演　オペラアンサンブル３１

２００９年１０月１７日(土)　武蔵野市民文化会館小ホール

けやきが開館した当時、結成されたばかりのソプラノ35ストグループ「オペラアンサンブル３１」の方たちが練習場としてけやきを使っていたという縁で、５年１０年１５年という節目の年にコンサートを開催してきました。今回も美しい歌声をホールいっぱいに響かせてクラシックの名曲の数々で観客を魅了。４人のトークもパワー全開で会場を沸かせ、２０周年を祝うにふさわしい素敵なコンサートになりました。熱のこもったステージを披露してくださった出演者の皆さん、会場いっぱいに盛り上げてくれた観客の皆さん、そしてスタッフの方々ありがとうございました。またお会いしましょう。

「大野田地域防災の会」立ち上げまで

歩み続けて二十年。そろそろけやきコミセンの行く道は何処へと考えなければならない時が来ていた。そのために「けやき明日の会」が発足し、皆と将来の夢や希望を語ってきた。2 年前、二十周年行事の準備のため実行委員会の結成を機にそれぞれの人が、夢や希望をテーマにいろんなことに取り組み始めた。そのひとつが『大野田地域に防災組織を立ち上げたい』であった。

ある日、江上先生からコミセンは「地域の事務局としての役割が必要」との話を聞き、印象深く心に残っていたので、記念すべき二十周年に、地域の事務局として何かをコーディネートしたいと話し合い、それには「人と人を繋ぐ役割をグローバルに仕掛けたい」と熱い胸のうちを語り合った。地球温暖化による異常気象、異常気象による災害や、地震が起きたときに（あってはならないが）地域の役に立ちたい、防災に強い明るいまちにしたい、との思いから防災に取り組もうと合意ができた。

そして「大野田福祉の会」「けやきコミセン」「緑町コミセン」の三組織で「大野田地域防災を考える会」を作り、「防災組織の立ち上げ」のための足がかりとして準備を進めた。情報交換をし、コミュニケーションをとりながら、話し合いや防災ウオッチングを重ねていった。正式名称、会則、役員もほぼ決まり、組織立ち上げの日（2010 年１月）を迎えることになっている。

組織立ち上げに不安な私に「出来ることからやればいいんだよ」の一言に励まされ、皆の協力や努力が無かったらここまで歩めなかったと思う。

今後、災害避難所のスムーズな運営のための訓練、日頃の防災に関する活動などを行いながら、地域力を高め、地域が一体となることが、我々のテーマである防災に強い明るいまちに近づけるだろう。　　（寺島芙美子）

みどりのまなびや　（２０周年学舎・しゃべり場共同企画）

コミュニティのあり方を話し合う集まりである学舎としゃべり場、開館２０周年記念として、歴史を知りこれからのコミュニティを考える場として共同企画みどりのまなびやを開催いたしました。お話をお願いすると、みなさん快く「けやきのために」と受けてくださり、貴重なお話を伺うことが出来ました。そのお話の一部です。

第１回みどりのまなびや「けやき DE しゃべろう！」

～学生たちはけやきで何を見つけたのか～

２００９年６月６日（土）４４人参加

けやきコミセンを研究し卒論にまとめた学生３人がけやきで何を見たのか、何を学んだのかを聞きながら、これからのコミュニティについて考えました。

司会進行　　江上　渉さん　　（立教大学教授）
研究発表
安井　基浩さん　（首都大学東京）
金井　元貴さん　（立教大卒　元けやき運営委員）
加藤　光樹さん　（上智大　現けやき運営委員）
コメント　　島森　和子さん・村井　寿夫さん
休憩後　～みんなでディスカッション～

＊首都大学　安井基浩さんの発表より

大学では建築を学んでいます。今回の論文では武蔵野市のコミュニティセンター全体のことについて調べ、実態調査の中でけやきコミュニテイセンターを取上げました。武蔵野市コミュニティセンターは設立当初から市民ボランティアによって管理運営がなされ、地域活動拠点として注目されてきました。しかし当初の諸室構成が今日の地域住民のニーズに対応しているのでしょうか。武蔵野市コミュニティセンターの来歴の把握と現在の実態の分析を同時に行うことで、これからのコミュニティ施設の計画に関する基礎的知見を得ることを目的としました。そのために４つの調査を行いました。市役所や各コミセンから集めた文献や統計による資料収集、協議会の代表の方々からのヒアリング調査、利用者の方へのアンケート調査と観察調査は平日休日の２日間行いました。

ヒアリングからたとえば、畳の上で立ったり座ったりという身体的負担から高齢者の和室利用が減っているということが聞かれました。それに対し座椅子などを貸し出すことで各館対応をしていました。また幼児の子育て場や災害時の非難用など昔とはちがった需要があると答えられました。

けやきは規模としては中型館に分類されます。ロビーであるコミュニティルームが受付とは離れた位置にあり、特徴が見られます。

利用者では平日休日共にコミュニティルームは市外からの利用が多いという結果がでたことは立地によることもありますが、けやきが市外からの利用者でも気軽に入れることが言えると思いました。平日の利用は小学生以下の利用は見られませんでしたが、休日は子どもたちの子どもルームでのゲーム利用が大半を占めるという偏った形が見られました。学習室も含め休日は一日をとおして学生の利用が多いことがわかりました。そして平日休日共に言えるのは、１９時前に利用者が極端に少なくなるということでした。

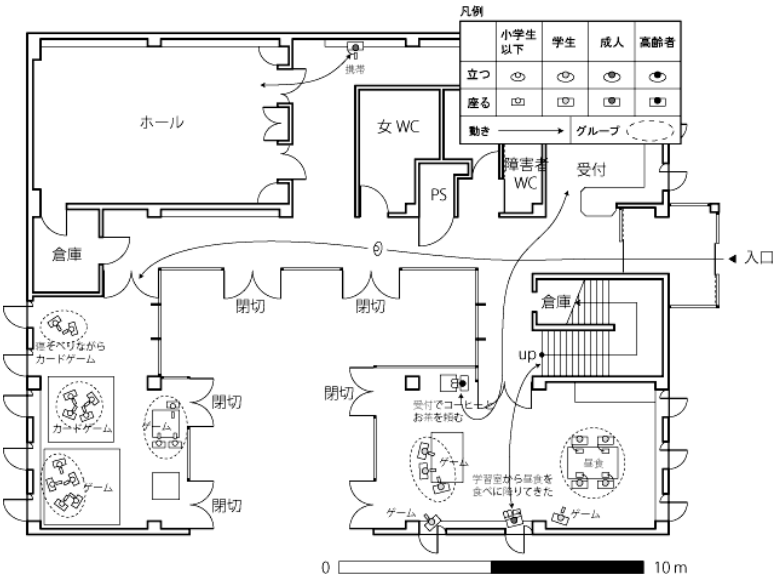


図　けやき1階における利用者分布例（2008/11/2（日）　14:00）

実際にけやきの１階で特徴的利用が見られた例にあげます。休日の午後２時の例です。小中高生がコミュニティルームや子どもルームでグループ形成をしながらゲーム類で遊んでいる様子が見られました。次に単独でコミュニティルームを利用している様子です。この女性はわりと長時間利用していて、受付にコーヒーやお茶をなんどか頼みながらここで読書をされていました。コミュニティルームの２人席はまとまりのある小さな空間なので単独で来た方に好まれているという様子が見られました。長時間学習室を利用されていた方がコミュニティルームで休憩をされている様子です。この方は自分でお弁当をもってきており、勉強の合間の休憩に２階の学習室から降りてきて、何度か休憩をされていました。ただそのときコミュニティルームで学生の集団が机をとっていたので椅子はあいているのですがその中には居づらいようで腰掛ベンチの方を自分の場所にしていました。

これまでコミュニティセンターは変化する利用者ニーズへの対応を求められてきました。とりわけ今日では多様化する利用者活動を支えるロビー空間の重要性が高まっていると言えます。そこで本研究ではロビー空間の形態の違いが利用者の属性や活動に及ぼす影響が大きいことを示しました。これからのコミュニティ施設では利用者の多様な活動を許容しうる可変性をもったロビー空間の計画をより強く意識することが求められるでしょう。

けやきを調査した中で興味深かった点を挙げたいと思います。それは、学習室のことですが、けやきの学習室は廊下でつながっていて１階と２階が吹き抜ける状態になっていて、非常に音が響きやすく学習環境としてはあまり適していない場所にあります。あるコミセンでブース式の予備校の自習室のような環境が整えられていますが、その学習室利用者からは防音設備をしっかりして欲しいなど苦情めいた意見が多く見られるのに対し、けやきコミセンの学習室利用者の方はそういった苦情めいたものは見られませんでした。その矛盾はなぜだろうと考えたときに、アンケートの施設選定理由という項目をみると、わかるように思いました。体育館などのある他コミセンによりもけやきの方は設備がよいと答えた方が多かった。学習室環境のことにも通じていることですが、それは「この館が好きだから」という理由を上げた方が他の館より高いことに起因すると思われます。音が響くのも含めてけやきを認めているからそれを受け入れている人がけやきを利用している。それが苦手な方はけやきに来ていない。武蔵野市コミュニティセンターがそれぞれボランティ

アによって運営され、それぞれに色をつけしてきたからこそ出てきた差だと思われるのでけやきコミュニティセンターがさらに自分たちの特徴をどう出していくかが大事になってくるのではないかとおもいました。

＊上智大学　加藤さんの発表より

けやきの運営委員をさせていただき、立教大学の江上先生のお世話になりました。もともとコミュニティに興味があったのですが、江上先生からユニークなコミュニティセンターがあるよと教えていただき、それでここに来ました。僕も一年間の活動を通して、ユニークなコミセンだなという感想をもっています。ユニークとは具体的にどういうことか。辞書で引いてみると、同じようなものがあまり見られぬ様と出ている。つまり他と違うよ！ということ。けやきの集まり方は、一応けやきにコミュニティ作りにきたり友達作りにきたりと、いろんな理由があるとは思うのですが、限定的な関心をもってきている人が多いと思う。そこでの協力関係は「えらい人を作らない」「ルールを作らない」という大原則がある。何か問題が起きたとき、えらい人がいなかったり、ルールが無いと話がまとまらない状態になってしまいます。そのデメリットをどう解決しているのかというと、「よく話し合う」と言う方法をとっています。協力関係としてはみんな同じポジションにたって話し合う。集団の機能としては、一見非合理であるけれど、みんながいろんなことをやれるという包括的な部分があるということです。

企業は経済的なお金をもうけたり、時間を短縮したり、みんながわかるものを追求して人が集まるのに対し、けやきは目に見えないものを欲しがっていると思います。けやきはそのつどみんなで対等な位置で話し合うので、支配がない。そこがけやきのユニークなところだと思います。みんなで話し合ったことがダイレクトに反映されるということ。理にかなっている。やろうと思ったことがやれる。それはもう一つの合理性だとおもうのでけやきはものすごい合理性があるのではないかと思う。目先の利益じゃないが、あとにちゃんと利益があるというものを世の中が探し出しています。けやきはそれを前からやっている。けやき的なことが世の中に増えているのだということがけやきを観察していていわかったことです。

＊立教大学卒　金井さんの発表より

そもそも自分がけやきに関わったのは２００５年春からで、４年間くらいずっと関わってきました。僕はいつも事務所とかに来てしゃべっていると、みなさんがコミュニティとかけやきとはなにかと考えて自分の意見を言ったりしていました。そういうところから人々のコミュニケーションそのものをどのように規定しているのかというところを作業観察、会話分析という手法を用いて修士論文を書きました。

３ 人の人がいて、けやきってなんですかと話したときに三人はそれぞれ違っている。もちろんけやきコミセンは共通している部分だが、そこにある地域だったり、組織（運営委員会）を考えたり、その人の住む地域が違ったりすると、自分の地元と対比して考えていたり、とそれぞれ違っている。おそらくけやきってなんだろうと投げかけられたときに、建物として根本的にけやきはあるのですが、考えがそれぞれ違っていてばらばらなイメー

ジのけやきが存在している。それがばらばらなままだとそれぞれの中でけやきってこうだよねと思っているだけで、一切けやきの共通のミッションが共有されない。たぶんひとりひとりで終わってしまい、いつまでもけやきが発展しない。そのような事態をけやきというのはなんども回避されてきたからけやきが２０年迎える状態になっている。このような集まりで、けやきというものの意味を誰かが常に発信している。自分なりのけやきの解釈を発信していて、そういう見方もあるのかそういうふうな考えもあるのね、けやきの課題はそこにあるのねと他のちがう考えの人とぶつかったりもする。いろいろな意見の人が議論したりすることで新しいけやきの像を再定義していく。個人の中で定義されていたことが論議を通して再びけやきを通して自分に戻ってくる。そして新しいけやき像が生まれる。そこをみんなで共有しあっていこうという意識が生まれていることがけやきの現象なのかなというところです。

僕が考えるに「けやき＝コミュニティってこうだよね」と思った瞬間にそれがコミュニケーションをとれないまま自分の中に固まってしまうと達成した瞬間にその言葉はいっさい発展しなくなる。けやきは若い人、新しい人が多いのですが、常にけやきと言う言葉の意味をそれぞれが新しくさせ、古い人たちに新しいけやきの意味をもたらすと言う役割ももっている。ただそこで重要なことがあって、話し合いを通してけやきというものが決まってくると、言葉の定義に合わない人が出てくる。自分と違うなという人が出てくる。そういう人はけやきから離れてしまうということは否めない。でもけやきは人の入れ替えをしながらどんどん古い人が卒業したり、新しい人が入ってくるようなことがある限りあたらしいコミュニティの意味を提示していくことにつながるのではないかということが修士論文で書きました。

＊　**講　評**　　**高田昭彦**（成蹊大学教授）

以上の報告から顕れてくるのは、「けやき」には独特のコミュニケーションがあるらしいということである。それは「けやき」内部でも漠然と感じられている。支配関係をつくらない、規約もつくらない、問題が生ずれば常に話し合う、「けやき」の原点に戻りながら話し合う、利用者とも話し合う、全員参加のイベントでも話し合って役割を決めるなどというもの。これら話し合いの枠組み、構造、内容を、「けやき」の置かれた社会的位置や歴史から、インタビューや意識調査を通じて明らかにしていこうと、今や若い人たちが取り組み始めた。その結果に期待したい。

お話　吉田善明さん「1970年代　武蔵野市のまちづくりの思い出」

北町３丁目在住、明治大学名誉教授、武蔵野市第二期長期計画委員長　　２２人参加

第二期長期計画の委員長を務められ、武蔵野市のまちづくりの出発点に関わってこられた吉田さんのお話をけやきの２０周年記念のイベントとして伺うことが出来たことをとてもうれしく思いました。学舎しゃべり場という気さくにしゃべりあう場でお聞きしたことが、大変もったいないことだったと今更ながらに思いますが、逆に身近な会でお話を伺えたことを感謝しております。

コミュニティセンターはどうして生まれてきたのか。いまでこそ武蔵野市は先進的と言われていますが、まだ市民意識の啓蒙からのスタートだった第１期のころのお話、地方自治専門の学者の方たちがたくさん武蔵野市に住んでいて、時にお酒を飲みながら市長を交えて、夜ふけまで議論し、反発されることがあってもその意見に耳を傾けつつも市民自治のまちづくりをやろうと様々な提案をされていった様子。町名や丁目の変更のころのお話。町名の前に吉祥寺という名を残したのは市民運動があったからとか。そしてあたらしい町ができた頃新しい住民がたくさん移転してきた時期とかさなり、町内会を作り直すことが出来なかった。だからこそ新しい形のコミュニティ作りが進められたそうです。吉祥寺を個性豊かな３つの圏域（文化圏・商業圏・教育圏）を形成しようと計画を立てられたこと。市役所がサービスの提供をし、それを当然だと受けるだけの市民ではなく、意見を言ったり自分たちで行動を起こせる自立した強い市民であるべきです。コミュニティは市民自治が基本であり、自立した市民の育成が大事である。だからコミセンに専任職員をおかないし、強制的な指導を市はしてはならないと話してきたとのことでした。

最近少し散歩をする時間ができてきて、扶桑通りの成蹊のブロック塀が美しくなく、地震のとき大変危険であること、千川上水をゆっくり歩けないほどの自転車問題など、まだ解決すべき課題も身近に多く、美しい北町、けやきの町にしたいですね
そのためには議会の動きなどに関心を持ちもっと意見要望を出していくべきですとのことでした。

お話　野津功さん「まちの木々を訪ねあるいて」

２２人参加

北町４丁目在住、元運営委員
花マップ（１９９３年）
お店マップ（１９９５年）
町内樹木ものがたり（２０００年）作成

まちは劇場、まちはびっくり箱！

実際にまちを歩き、人と出会い、好奇心一杯で話を聞き、さらに関心を深めていくという野津さんのお話は、とても刺激をいただきました。けやきが規模や活動も広がり、楽しくイベントを行ってきたが、もっと外に目を向け、コツコツ拾い集めると、人材もアイデアも課題もまちにたくさんあふれている。

素敵な建物を与えられ、管理運営にも多くの人が関わっているが、なんのための建物か。地域のコミュニティ、まちづくりのための拠点として大切な場であるけれど、ソフト面つまり人の心を繋ぐことが主体であることを忘れてはいけないと思いました。

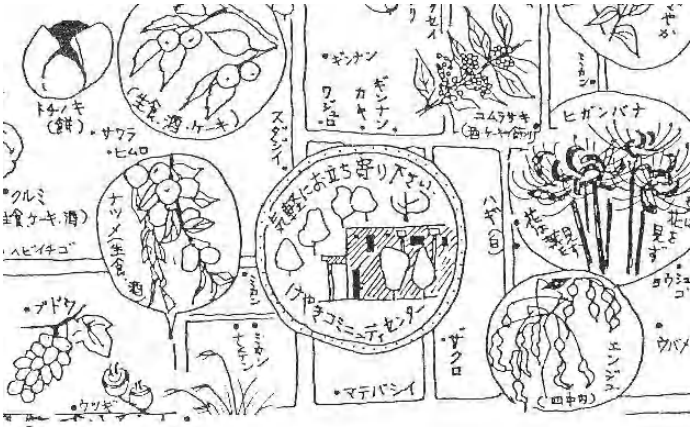
みんなで一緒にということが苦手なお話、やり方はうまくいかなかったことがあっても、まちの人に飛び込んで取材されて作ったマップの精神はこれからのけやきのまちづくりに活かされることだと思います。

好奇心をもって　まちを歩こう！！

野津さんからの思いつくままのご提案

千川上水からくり水車コンテスト
挨拶をするまちづくり
けやき並木ワークショップ
ホームページのリンクの拡大
劇団を持つコミセン
宿泊のできるコミセン
朝食をご一緒に・・・など

最後に、楽しい集まりばかりでよいのか。参加できる人おしゃべりできる人はいいですが、本当に寂しい人困っている人に手を差し伸べる地域活動をみんなで考えていけたらよいという提案をいただきました。



花マップ　秋の実りより

宇賀神勲さん「80 年前のこのまちをしっていますか」　３１人参加

昭和５年からこの地に住まわれ子どもの頃のこのまちのことを、ご自身のことを含めてお話いただきました。

妹さんをはじめ地域の方々がこの地の歴史を語ってくださいました。

このあたりは雑木林、桑畑、麦畑が広がり、おうちから富士山や秩父連山が眺められたそうです。中央線や西武線の音が聞こえるかどうかで天気予報より正確な天気がわかったとか。さえぎるものが何も無いところでした。ぬかるみの道を第一小学校まで通い、五日市街道には進運バスと牛車がいた。梅雨時は天井が蝿でまっくろだったり、寝ていると青大将がらんまから顔を出してビックリした。雨戸や窓をしめても砂埃が入り、お掃除が大変だったとか。牡丹園という名所があったこと。窪地に水が出て井の頭からボートが来たこと。

戦争の時代のお話。中島飛行機製作所を狙って B29 がたくさん飛んできて大空襲。自宅にも爆弾が落とされ、爆風で近所の南北にガラスが割れた。成蹊に航空司令部があり、高射砲が陸上競技場の土手にあった。四中は中島飛行機の青年学校だった。遠くに落ちる爆弾はとてもきれいに見えた。経験ある方たちも次々と話されました。私たちのまちでほんの少し前、空襲に逃げ惑っていたことに改めて驚きます。身近な方々が身近な場所で体験されたお話を聞くとタイムスリップしたようです。

平和とは何か、豊かさとは何か、時代は流れていきますが、このまちは人と人とが安心してつながりあえるあたたかなところでありたいと思います。